

ここまでやるとは思わなかったよ。

それが私たちイベントをつくる者の役目なんだと思います。

「私たちの舞は神楽殿で演じるものが本物。イベントでは良さが伝わらないでしょう。」新潟県の伝統芸能を紹介するイベントを担当したとき、ある演目についてそんな話しが耳に入りました。

その話しの通り、伝統芸能はその地域や地域の持つシチュエーションで演じてこそ意味のあるものですが、イベントの現場ではそこまでしっかりと配慮されることは稀と言えます。だから、そのような声が聞こえてきたのでしょう。

しかし今回は伝統芸能が主役。その良さを伝えることができる舞台の設定や演出が必要です。そこで、神楽殿を思わせるような欄干を用意して、とっていただいたら問題発生。

欄干製作を見積もりしたら大幅に予算をオーバー。ではと、東京・大阪の映画やテレビの美術や大道具を扱うレンタル会社を探してみても見つからず、もうだめかとあきらめかけたとき、「倉庫を探したら以前に作ったものが残っていました」との一報が・・・。

「ここまでやるとは思わなかったよ」
本番が終わってから関係者から聞こえてきた一言です。

プロ・アマ問わずステージで演じる人たちは、その時のステージ環境がどうであれ、全力で自分たちのパフォーマンスを行ってくれます。

しかし、どんなステージや環境を準備するのかによってそのパフォーマンスが持つ感動力というものは変わってくるものです。

その時々イベントやパフォーマンスが持つ感動をしっかりと伝えられるようにすること、それが私たちイベントをつくる者の役目なんだと思います。

(有)アズ・コミュニケーションズ
イベント成功サポーター 畔上 義弘